

The Tokyo Tanuki Times

東京タヌキタイムズ

2016年3月号 通巻87号 毎月1日発行 購読無料

©MIYAMOTO Takumi,2016

責任編集：宮本拓海 発行：東京タヌキ探検隊！tokyotanuki.jp

タヌキの巨大なアレの正体は？

それは寄生虫病だった！？



(左)北斎漫画十二編の扉ページ。

(右)問題のアレの図。「大囊」という題が付けれられている。二人の男が竿で運んでいるのが巨大なアレなのである…。

図版は国立国会図書館デジタルコレクションより転載。「北斎漫画 12編」の11コマ目に掲載されている。

同サイトでは北斎漫画全編の他、歴史的な文献も多数公開されている。

<http://dl.ndl.go.jp/>

世間的に有名なタヌキのイメージのひとつとして「巨大な陰囊」というものがあります。実際にはタヌキの陰囊(以下「アレ」と表記)が特別に大きいという事実はありません。なぜそんな根も葉もない説が流布しているのか謎でした。

北斎漫画にも登場

この疑問の答えの端緒は目黒寄生虫館にありました。朝日新聞(2016年1月8日、東京版)での同館を紹介した記事によると、巨大なアレは「バンクロフト糸状虫による陰囊水腫」であり、北斎漫画にも絵が載っているというのです。「北斎漫画」とは葛飾北斎(1760-1849)による「イラスト集」といったもので、全15編あります。実は私は北斎好きなのですが、そんなのあったかな？と記憶にありません。さっそく北斎漫画をひっくり返して調べてみました。その絵が載っていたのは十二編でした。天保5年(1834年)の刊行で、北斎の生前に刊行された北斎漫画の最後の巻

となります。この十二編は特に滑稽な題材を扱っていることで知られています。

この絵の巨大なアレは誇張ではなく、実在する寄生虫病「バンクロフト糸状虫症」によるものだそうです。糸状虫とはフィラリアのことで、大きくくくれば線虫の仲間ということになります。フィラリアというとイヌの寄生虫としてよく知られていますが、実際にはそれ以外のさまざまな種類が含まれています。大村智氏のノーベル賞受賞で有名になったイベルメクチンはオンコセルカ症の治療薬ですが、そのオンコセルカも糸状虫の仲間です。

バンクロフト糸状虫症ではリンパ管が破壊されてリンパ液(組織液)の循環ができなくなり体にむくみが生じます。リンパ管が破壊された場所がアレだと北斎漫画のようなことになってしまいます。破壊された場所がアレ以外のこともあり、例えば足が肥大することがあります。

バンクロフト糸状虫症は力によって媒介されます。現代日本では根絶

されていますが、国外では今でも発生している寄生虫病です。

タヌキとは多分無関係

ただしこのバンクロフト糸状虫は人間のみに寄生する種類です。タヌキで同様の症状を起こす糸状虫がいるのかは不明ですが、おそらく存在しないと思われます。ではこの寄生虫病がなぜタヌキと結びついたのか理由ははっきりしませんが、江戸時代初期にはタヌキの巨大なアレの記述があるそうです。それが広く普及したのは18世紀後半のことで…。

と、ここまで書いたところで紙面が尽きてしまいました。この続きはまた別の機会にしたいと思います。

スポンサー枠

スポンサー募集中です！

全国のタヌキ、ハクビシンなどの情報を集めています。

<http://tokyotanuki.jp>